

## 斎藤秀三郎とスウィントン英文典

柳 浦 恭

### Hidesaburo Saito and Swinton's New Language Lessons

Kyo YANAURA

#### Abstract

The purpose of this paper is to find out how Swinton's *New Language Lessons* exerted an influence upon *English Conversation Grammar* compiled by Hidesaburo Saito and published in 1893, at the early stages of English Education in Japan. The comparison of *New Language Lessons* with its Japanese translation by Saito reveals that there are certain parts in the original which turned out to be omitted in the translation and that a certain degree of similarity exists between this "missing portion" of the original and *English Conversation Grammar* by Saito. One possible explanation for this fact is that Saito may have derived an inspiration concerning the idea of analysis, that is, a systematic way to separate a sentence into its constituent elements, from *New Language Lessons* by Swinton. This finding should be of significance in view of the fact that Saito developed the idea of sentence analysis into one of the major principles in his later works.

#### キーワード

斎藤秀三郎、英学史、スウィントン、英文典、英会話文法

#### 1 はじめに

斎藤秀三郎の処女作はスウィントン英文典の翻訳『スウィントン氏英語学新式直訳』<sup>(1)</sup>だが、大村喜吉は『斎藤秀三郎伝』<sup>(2)</sup>でこの翻訳書を分析し、スウィントン英文典は斎藤の後年の文法とは直接関係が無いと論じている。<sup>(3)</sup>筆者はこの点に疑問を持ちスウィントンの原典と斎藤の翻訳との比較・対照を試みた。その結果、翻訳で欠落している部分と斎藤後年の著作『英会話文法』<sup>(4)</sup>との間に類似点を発見することができた。それは「文の分析」という英語学習上のストラテジーである。斎藤が日ごろ文の analysis ということを教え子に強調していたというエピソードからしても、<sup>(5)</sup> 斎藤秀三郎の英文法が完成されていく上でスウィントン文典の意義は再評価されるべきであると筆者は考える。最近英語学習における英文法の意義についてさまざまな議論があるが、日本における英語教育の原型を創りだした人物の足跡を確認することは、われわれに何らかのヒントを与えてくれるものと思われる。

#### 2 斎藤秀三郎とは

斎藤秀三郎は明治・大正期に活躍した英語学者・教育家だが、生まれは慶応2年と古く、英語教育の専門家の間でも若い世代となると知る人は少ない。なにし

ろ慶応2年とは徳川慶喜が第15代将軍となった年であり、戊辰戦争が勃発する2年前のことである。そこで本稿の読者が必ずしも英学史あるいは英語教育史の専門家とは限らないということを考慮し、まず斎藤の略歴を紹介しておきたい。<sup>(6)</sup>

慶応2年(1866年)	仙台藩士斎藤永頼の長男として仙台に生まれる。
明治4年(1871年)	仙台藩の英語学校、辛未館に入学する。
明治7年(1874年)	宮城英語学校に入学、オハイオ出身のアメリカ人、グールドに学ぶ。授業は主として外国人教師が英語で教授したという。同校は後の旧制仙台中学校の前身となった。
明治12年(1879年)	宮城英語学校を卒業後、東京大学予備門に入学する。
明治13年(1890年)	工部大学校(現東京大学工学部)に入学し、化学および造船を専攻する。在学中にスコットランド出身のイギリス人ジェイムス・メイン・ディクソンに英語を学ぶ。この時期に斎藤は図書館の英書を読み尽くし、大英百科事典を2度通読したという。
明治16年(1883年)	工部大学を中退する。退学の理由とし

- ては海外密航を企てたという説と、吉原通いなど放蕩のためとする説がある。
- 明治17年(1884年) 『スウィントン氏英語学新式直訳』(十字屋・日進堂)を翻訳出版する。その後仙台に戻り英語塾を開設。初期の教え子に土井晩翠がいた。
- 明治20年(1887年) 旧制第二高等学校の助教授となるも、翌年辞職。当時同校で英語主任だったアメリカ人フランク・ハーレルと意見の衝突があったためであるという。斎藤が使用した教材の難易度に関しハーレルが疑問を呈すると「米人には難しく、解らぬかも知れぬが、日本人には解る」と譲らなかったと伝えられている。
- 明治22年(1889年) 旧制岐阜中学校へ赴任。校長から中学校英語教師の資格検定試験を受験するよう言われると「誰を試験するのですか」と言い放ち辞職したという。その後明治25年(1892年)に長崎鎮西学院および旧制名古屋第一中学校を経て明治26年(1893年)旧制第一高等学校の教授となる。明治30年(1897年)同退職。
- 明治29年(1896年) 神田錦町に正則英語学校(現正則学園高等学校)を設立する。この後は同校を本拠として執筆・教育活動に専念する。
- 明治37年(1904年) 東京帝国大学に講師として出講。斎藤の試験問題は当時の帝大生にとっても難しく、恐れられたという。他の教員から「あなたの方法で英語を研究するとどんな本が読めますか」と皮肉を言われると、「あなたはどんな本が読みたいのですか」と切り返して辞職。
- 昭和4年(1929年) 直腸癌のため逝去、享年64歳。療養中も最後の日まで本を手離さなかったという。

斎藤の代表的著作としては明治31年(1898年)から翌年にわたって出版された *Practical English Grammar* 全4巻<sup>(7)</sup>や『斎藤英和中辞典』<sup>(8)</sup>、『斎藤和英大辞典』<sup>(9)</sup>などがあり、当時の英語学習者に多大な影響を及ぼした。さらに斎藤の正則英語学校で学び、後には同校で教鞭を執った山崎貞による『自修英文典』<sup>(10)</sup>や『英文解釈研究』<sup>(11)</sup>は第二次世界大戦後も版を重ね、受験参

考書のルーツとなっているが、これらの著作が正則英語学校での教授法を忠実に反映していることは山崎自身が認めている。<sup>(12)</sup>ちなみに『斎藤和英大辞典』はデジタル化され、<sup>(13)</sup>家電量販店のPCソフトウェアのコーナーでも求めることができる。日本国内でこれだけ息の長い語学書は他に類を見ないといえよう。大村喜吉は次のように斎藤を評した。

「今日の前にある斎藤の全著作を畳の上に積み上げてみると、彼の身長は六尺五分として、その約一倍半に当る。ほぼ満六十三年十カ月の生涯に放たれたこの日本人のエネルギーを想像することが出来よう」<sup>(14)</sup>

まさに文字通り全身全霊を英語に捧げた壮絶な生きざまであった。

### 3 『スウィントン氏英語学新式直訳』について

前述のとおり、工部大学校を中退した斎藤秀三郎が初めて世に出した本は『スウィントン氏英語学新式直訳』というタイトルの翻訳書であった。斎藤の最古参の教え子として知られる伝法(つのもり)久太郎によると、斎藤はスウィントンの文典に接したとき、「英語はこうやってやらなければいけない」と言いながら「ああこれなる哉、是れなる哉」と快哉を叫んだという。<sup>(15)</sup>それほど斎藤が刺激を受けたはずのスウィントンの影響について、大村は懐疑的な立場をとる。

「スウィントン英文典自体は後年の斎藤秀三郎の英文法と直接関係のないものである。この点、ディクソンの著作がいろいろな点において斎藤の著作にその影響の跡を残していることは同日に論ぜられない。兎に角その基礎英語をグールドから、イディオム研究をディクソンから取り出して来た斎藤秀三郎は『文法』と云う枠をスウィントンから抜き取ったものと見ることが出来るよう。」<sup>(16)</sup>

筆者はこの点に疑問を抱き、斎藤の翻訳とスウィントンの原典<sup>(17)</sup>とを比較してみることにした。まず以下に『スウィントン氏英語学新式直訳』の構成を原典と対照しながら紹介する。同書およびその原典は現在九州大学の筑紫文庫および国会図書館に収蔵されているが、百年以上も昔の書籍でもあり、他では閲覧または入手することは難しいと思われる。この事情に鑑み、冗長に陥ることのない範囲で概要を俯瞰していく。

(左側：訳本の構成)

第一章 詞ノ種類

- 第一 名詞又ハ名ノ語
- 第二 働詞又ハ働ノ語
- 第三 形容詞
- 第四 副詞
- 第五 代名詞
- 第六 前置詞
- 第七 接續詞
- 第八 間投詞

第二章 文章及ビ其レノ元辭

- 第九 文章ノ畧説
- 第十 文章ノ種類
- 第十一 主及ビ屬部
- 第十二 解剖及ビ組成
- 第十三 單ナル及ビ完キ主及ビ屬部

- 第十四 改定サレタル主 (形容詞ニ依テ)
- 第十五 形容詞改定語 (組成)
- 第十六 改定サレタル主 (領格ノ名詞ニ依テ)
- 第十七 領格ノ改定語 (解剖)
- 第十八 領格ノ改定語 (組成)
- 第十九 改定サレタル主 (附添ニ於テ名詞ニ依テ)
- 第廿 附添ノ改定語 (解剖)
- 第廿一 附添ノ改定語 (組成)
- 第廿二 改定サレタル主 (句ニ依テ)
- 第廿三 句ノ改定語 (解剖)
- 第廿四 改定サレタル屬部 (副詞ニ依テ)
- 第廿五 改定サレタル屬部 (副詞)
- 第廿六 改定サレタル屬部 (解剖)
- 第廿七 改定サレタル屬部 (組成)
- 第廿八 物體ヲモッテノ屬部
- 第廿九 物體ヲモッテノ屬部 (解剖)
- 第卅 物體ヲモッテノ屬部 (組成)
- 第卅一 屬部ノ形容詞及ビ主格
- 第卅二 完意語ヲモッテノ屬部 (解剖)

第三章 詞類ノ小分

- 第卅三 名詞 (各稱ノ)
- 第卅四 名詞 (普通ノ)
- 第卅五 名詞 (無形ノ)
- 第卅六 名詞ノ再閲
- 第卅七 名詞 (組織法ノ例題)
- 第卅八 代名詞 (人稱ノ)
- 第卅九 代名詞 (關係ノ)
- 第四十 代名詞 (疑問ノ)
- 第四十一 代名詞ノ後閲
- 第四十二 形容詞 (極メル處ノ)
- 第四十三 形容詞 (限ル所ノ)

(右側：原著の対応部分)

SECTION I. CLASSES OF WORDS.

- I. NOUNS, OR NAME-WORDS.
- II. VERBS, OR ACTION-WORDS.
- III. ADJECTIVES.
- IV. ADVERBS.
- V. PRONOUNS.
- VI. PREPOSITIONS.
- VII. CONJUNCTIONS.
- VIII. INTERJECTIONS.

SECTION II. THE SENTENCE AND ITS ELEMENTS

- IX. DEFINITION OF THE SENTENCE
- X. KINDS OF SENTENCES.
- XI. SUBJECT AND PREDICATE.
- XII. ANALYSIS AND SYNTHESIS.
- XIII. SIMPLE AND COMPLETE SUBJECT AND PREDICATE.
- XIV. SUBJECT MODIFIED: By Adjective.
- XV. ADJECTIVE MODIFIERS: Synthesis.
- XVI. SUBJECT MODIFIED By a Possessive Noun.
- XVII. POSSESSIVE MODIFIERS: Analysis.
- XVIII. POSSESSIVE MODIFIERS: Synthesis.
- XIX. SUBJECT MODIFIED: By a Noun in Apposition.
- XX. APPOSITIVE MODIFIERS: Analysis.
- XXI. APPOSITIVE MODIFIERS: Synthesis.
- XXII. SUBJECT MODIFIED: By a Phrase.
- XXIII. PHRASE MODIFIERS: Analysis.
- XXIV. PREDICATE MODIFIED: By an Adverb.
- XXV. PREDICATE MODIFIED: Adverbial Phrase.
- XVI. PREDICATE MODIFIED: Analysis.
- XVII. PREDICATE MODIFIED: Synthesis.
- XVIII. PREDICATE WITH OBJECT.
- XIX. PREDICATE WITH OBJECT: Analysis.
- XXX. PREDICATE WITH OBJECT: Synthesis.
- XXXI. PREDICATE ADJECTIVE AND NOMINATIVE
- XXXII. PREDICATE WITH COMPLEMENTS: Analysis.

SECTION III. SUBDIVISION OF THE PARTS OF SPEECH

- XXXIII. THE NOUN: Proper.
- XXXIV. THE NOUN: Common.
- XXXV. THE NOUN: Abstract.
- XXXVI. REVIEW OF NOUNS.
- XXXVII. THE NOUN: Constructive Exercises.
- XXXVIII. THE PRONOUN: Personal.
- XXXIX. THE PRONOUN: Relative.
- XL. THE PRONOUN: Interrogative.
- XLI. REVIEW OF PRONOUNS.
- XLII. THE ADJECTIVE: Qualifying.
- XLIII. THE ADJECTIVE: Limiting.

- 第四十四 形容詞ノ再聞
- 第四十五 形容詞（組織法ノ例題）
- 第四十六 働詞（移行ノ及ビ自働ノ）
- 第四十七 副詞（單ナル及ビ接續ノ）
- 第四十八 接續詞（同等用ノ及ビ附屬用ノ）

#### 第四章 詞類ノ變化

- 第四十九 變化ノ畧説
- 第五十 名詞ノ變化
- 第五十一 名詞（組織法ノ例題）
- 第五十二 代名詞
- 第五十三 形容詞及ビ副詞ノ變化
- 第五十四 働詞ノ變化

#### SECTION IV. MODIFICATIONS OF THE PARTS OF SPEECH

- XLIV. REVIEW OF ADJECTIVES.
- XLV. THE ADJECTIVE: Constructive Exercises.
- XLVI. THE VERB: Transitive and Intransitive.
- XLVII. THE ADVERB: Simple and Conjunctive.
- XLVIII. THE CONJUNCTION: Co-ordinate and Subordinate.
- XLIX. MODIFICATIONS DEFINED.
- L. MODIFICATIONS OF THE NOUN.
- LI. THE NOUN: Constructive Exercises.
- LII. MODIFICATIONS OF THE PRONOUN.
- LIII. MODIFICATIONS OF THE ADJECTIVE AND ADVERB.
- LIV. MODIFICATIONS OF THE VERB.

以上から次のことがらが読み取れる。

1. 品詞の分類については現代の学習文法と同じ八品詞となっている。
2. この文典では文のANALYSIS および SYNTHESIS を重視している。前者は文を構成要素に分解すること、後者は個々の構成要素から文を組み立てることを意味する。
3. 主語となる名詞に対する修飾関係という観点から形容詞、名詞および代名詞の所有格、名詞の同格を分析している。
4. 述部に用いられる動詞に対する修飾関係という観点から副詞および副詞句を分析している。
5. 述語動詞を補う要素として現在の学校文法で主格補語および目的語に相当する概念を用いている。
6. 日本の学校文法で定説となっている五文型のうちで、二重目的語および目的格補語に相当する概念は見られない。
7. 可算名詞と不可算名詞の区別は明示されておらず、committee のような集合名詞は普通名詞の項で扱っている。<sup>(18)</sup> また物質名詞という概念は見られない。

#### 4 訳出されなかった原典の部分について

斎藤による翻訳とスウィントンの原典を比較・対照していくと、原典の SECTION V および SECTION VI が訳出されていないことに気がつく。ここではこの部分について検討したい。

#### SECTION V SYNTAX

スウィントンは統語論を次のように定義する。

Syntax is that division of grammar that treats of the relations of words in sentences. It is divided into two

parts—parsing and the rules of construction. Parsing consists in stating the class, subdivision, and modifications of the words in a sentence. The rules of construction are the statements of the general principles governing the relations of words in sentences. <sup>(19)</sup>

（統語論とは文中における単語間の関係を扱う文法の部門である。それは2つの部分、すなわち「文の解剖」および「語句の組み立てに関する諸規則」に分けられる。文の解剖は文中の単語の品詞およびその下位分類、そして形態変化を明示する。語句の組み立てに関する諸規則は文中における単語間の関係を決定する一般的な原理・原則を明示する。）<sup>(20)</sup>

この定義に基づき、さらにスウィントンは文の分解に必要な基準を品詞別に提示している。

- 名 詞
  - 1) 下位分類（固有名詞、普通名詞、抽象名詞）
  - 2) 数（単数、複数）
  - 3) 格（主格、所有格、目的格）
- 代名詞
  - 1) 下位分類（人称代名詞、関係代名詞、疑問代名詞）
  - 2) 人称（一人称、二人称、三人称）
  - 3) 数（単数、複数）
  - 4) 性（三人称単数の場合のみ）
  - 5) 格（主格、所有格、目的格）
- 形容詞
  - 1) 下位分類（限定、修飾）
  - 2) 比較（原級、比較級、最上級）
  - 3) 機能（限定詞、叙述詞）
- 動 詞
  - 1) 活用（規則、不規則）
  - 2) 下位分類（完全、不完全）
  - 3) 態（能動、受動）
  - 4) 法（直説法、可能法など）

- 5) 時制 (現在、過去など)
- 6) 人称 (一人称、二人称、三人称)
- 7) 数 (単数、複数)
- 副 詞 1) 下位分類 (単純、接続)
- 2) 比較 (原級、比較級、最上級)

そのほか、語句の組み立てに関する諸規則は主語と述語動詞の人称や数の一致、名詞の格と文中での機能との対応などを扱っており、文中での単語間に存在する諸関係に重点が置かれている。

## SECTION VI ANALYSIS AND SYNTHESIS

この章はSECTION IIのXIIで提示したことがらをさらに敷衍して説明し、同書全体の総まとめ的な性格を持つ。ここではスウィントンの主部と述部に関する考えの特徴を以下にまとめておきたい。後年の斎藤を知る手掛かりとなるためである。

1. 主語と述語動詞を文の主要な要素としている。
2. 主語や述語動詞の意味を限定あるいは修飾する要素を adjunct または modifier と呼び、現代の学校文法で主格補語および他動詞の目的語と呼ばれる要素との区別は明確になっていない。

以上を踏まえ、次章では後年の斎藤による著作と比較してみたい。

## 5 『英会話文法』との類似点

明治26年7月、旧制第一高等学校の教授となった斎藤秀三郎は同年10月に『英会話文法』を出版した。同書は旧制中学校で使用される教科書として広く受け入れられ、大正14年には第100版を数えるにいたった。<sup>(21)</sup> 教科書としては異例のベストセラーといえよう。大村は同書について次のように評した。

「(英会話文法は) 後の斎藤文法を予示している点からも注目すべきものである。日本の学校文法の原型がこゝにあると言うことが出来る。」<sup>(22)</sup>

『英会話文法』には文法事項のまとめがあり、この部分から斎藤の文法観をうかがい知ることができる。以下に概観し、スウィントンと比較してみたい。

斎藤はまず文を主部と述部に分け、主語となりうるものが名詞および代名詞、述部になりうるものが動詞であると説く。次に主語となる名詞、述語となる動詞に

ついて以下のように述べている。

The Subject may be enlarged by --

- I. Adjectives;
- II. A Noun or a Pronoun in the Possessive Form;
- III. Adjective Phrase (Preposition + Noun);

The Predicate Verb may be enlarged by --

- I. Adverbs;
- II. Adverbial Phrases (Preposition + Noun);
- III. Some verbs take an Object (Noun or Pronoun);
- IV. The verbs be, become, etc., are followed by an Adjective or a Noun. <sup>(23)</sup>

主語を補完する要素として形容詞、名詞および代名詞の所有格を捉えている点、そして述語動詞を補完する要素として副詞と共に他動詞の目的語および現在の学校文法で主格補語とされる形容詞と名詞を挙げている点はスウィントンの文典との強い類似性が認められる。なお、スウィントンは斎藤による翻訳の原典となった *New Language Lessons* のほかに、*Language Lessons* <sup>(25)</sup> を1876年に出版している。この著作でスウィントンは文の分析を以下のように定義する。

The Analysis of a Simple Sentence consists in pointing out the Subject and the Predicate, and the enlargement or enlargements, if any, of the Subject and of the Predicate. <sup>(24)</sup>

(文の分析ではまず主語と述語を特定し、必要に応じて主語と述語の意味を拡張する語および語句を特定する。)<sup>(25)</sup>

主語および述語の意味を「拡張する」、つまり "enlarge" するという斎藤の発想はスウィントンの由来する可能性が高い。

さらに斎藤の『英会話文法』とスウィントンの *New Language Lessons* を比較すると文の分析に関する定義が酷似していることに気づく。以下に両者を列挙する。

### 斎藤の定義

To analyze a sentence, is to separate it into the parts or elements of which it is made up. <sup>(26)</sup>

### スウィントンの定義

Analysis is the separation of a sentence into the parts, or elements, of which it is composed. <sup>(27)</sup>

このように両者を比べてみれば、斎藤がスウィントン

からインスピレーションを得たことは想像に難くない。『英会話文法』で斎藤が展開する文の分解は *New Language Lessons* の SECTION V および SECTION VI、すなわち斎藤による『スウィントン氏英語学新式直訳』において訳出されなかった部分に準拠していると考えてよい。斎藤がなぜこの部分を訳出しなかったのかは想像の域を出ない。出版社の事情によりページ数に制限があったためか、あるいは後年の斎藤が展開する英語学の「核」となる発想をまだ他者に知られなかったのか。真相は斎藤のみが知る、ということだろう。

## 6 おわりに

本稿では斎藤秀三郎による翻訳『スウィントン氏英語学新式直訳』を取り上げ、その原著であるスウィントンの *New Language Lessons* との比較・対照を試みた。その結果、訳出されていない原著の部分に後年の斎藤の著作との類似点を認めることができた。それは文の分析、すなわち “analysis” という発想である。斎藤は日本における英語教育の黎明期に大きな足跡を残した人物である。彼の発想の「根」を辿ることは日本の英語教育の原点を探る試みでもある。筆者は日常の授業で学生を指導する時に、英文を構成要素に分解すると学生の理解に役立つことを頻繁に経験している。斎藤秀三郎の着想は外国語の学習ストラテジーについて現代の我々に示唆するところが少なくない。

## 注)

- (1) 斎藤秀三郎『スウィントン氏英語学新式直訳』十字屋・日進堂合刊、明治17年
- (2) 大村喜吉『斎藤秀三郎伝』吾妻書房、昭和35年
- (3) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.74
- (4) 斎藤秀三郎 *English Conversation-Grammar*、興文社、明治26年
- (5) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.102
- (6) 前掲『斎藤秀三郎伝』に基づき柳浦が纏めた。
- (7) 斎藤秀三郎 *Practical English Grammar* 全4巻 興文館、明治31-32年
- (8) 斎藤秀三郎『斎藤英和中辞典』日英社、大正4年
- (9) 斎藤秀三郎『斎藤和英大辞典』日英社、昭和3年
- (10) 山崎貞『自修英文典』研究社、大正2年
- (11) 山崎貞『英文解釈研究』研究社、大正元年
- (12) 前掲『自修英文典』「はしがき」に拠る。
- (13) 斎藤秀三郎『NEW斎藤和英大辞典』日外アソシエーツ辞書編集部編、ロゴヴィスタ株式会社、平成11年

- (14) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.543
- (15) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.70
- (16) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.75
- (17) William Swinton, *New Language Lessons*, American Book Company, 1877  
なお、九州大学筑紫文庫所蔵の同書は六合館覆刻版。
- (18) 前掲 *New Language Lessons* p.61
- (19) 前掲 *New Language Lessons* p.116
- (20) 柳浦試訳
- (21) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.146
- (22) 前掲『斎藤秀三郎伝』 p.138
- (23) 前掲 *English Conversation-Grammar* pp.112-113
- (24) William Swinton, *Language Lessons*, HARPER & BROTHERS, 1876
- (25) 柳浦試訳
- (26) 前掲 *English Conversation-Grammar* p.116
- (27) 前掲 *New Language Lessons* p.144